

令和8年8月1日

宮崎大学

No. 39

発行

宮崎大学工学部
化学会

〒889-2192 宮崎市学園
木花台西1丁目1番地
TEL(0985)58-7390(菅本)
FAX(0985)58-7323

工学部化学会会報



改修工事後の宮崎大学工学部 A 棟外観



改修工事前の宮崎大学工学部 A 棟外観

CONTENTS

- ごあいさつ.....2
- 理事会報告.....3
- 支部だより.....6
- 松井先生 受章の祝辞.....10
- 特集 菅本先生 教授就任への祝辞.....11
- 応用物質化学プログラムだより.....12
- 新みやざきはいま.....20

ごあいさつ



会長
日高宗徳
(59 年卒)

例年、異常気象が続き、地震・台風・竜巻・洪水など、皆様のお住まいの地域でも心を悩ませる事象が増えてきているのではないのでしょうか。

今年も宮崎は温暖な気候に恵まれ、スポーツ関連のキャンプ地として多くの方々が来県され、初春の頃には大変な賑わいを見せています。木花キャンパスにほど近い地域でも今年は WBC のキャンプが行われるとのことで、宮崎大学の一般選抜前期日程の試験日前日までとはいえ、宿泊施設や交通機関への影響もあり、受験生や大学関係者の方々は気を揉まれているようです。

皆さんが学生時代に過ごされた宮崎は、宮崎駅周辺や繁華街が大きく変化しつつあります。かつての行きつけのお店がどうなっているか、同窓生が元気にしているかなど、久しぶりに確かめに来られてはいかがでしょうか。また、木花キャンパスの建物も昨年リニューアルされましたので、ぜひ一度足を運ばれることをお勧めいたします。

旧霧島キャンパスから工学部が移転し、昭和 62 年 11 月 1 日に化学会会報が佐藤松尾副会長(昭和 41 年卒)を中心に編集会議を重ねて発行されて以来、今回第 39 号を迎えました。先輩方の思いを後世へつなげることは大変意義深く、学会の伝統の継承にもつながっています。

2025 年 化学会同窓会の主な活動報告

3 月 24 日

宮崎大学の卒業式がシーガイアコンベンションセンターで行われ、化学科・応用化学専攻の卒業生、修士課程修了生、先生方を含め 110 名を超える皆様の祝典に参加し、化学会への参加を呼びかけました。その結果、東京支部および福岡支部の同窓会に新卒の方々が参加され、大変喜ばしい出来事となりました。

6 月 14 日

東京支部同窓会が新宿で開催され、宮崎から保田昌秀名誉教授、大島達也教授にもご参加いただき、14 名で親交を深めました。

7 月 12 日

宮崎支部理事会が大学にて開催され、改修工事を終えた研究室や化学実験室を見学しました。学生時代とは全く異なる整備された環境となっており、理系女子にも人気の高い学科であることを改めて実感しました。

7 月 19 日

工学部南九州支部同窓会がニューウェルシティ宮崎で開催されました。工学部同窓会理事長には、化学生命プログラムの稲田飛鳥准教授が就任されており、化学会同窓会の活動にも反映していきたいと考えております。

10 月 4 日

宮崎大学ホームカミングデー(2年に一度の開催)および本部理事会を実施しました。各支部長にはオンラインでご参加いただきました。名古屋支部の高松昇司支部長は卒業後初めて宮崎を訪れ、学生時代からの大きな変化に懐かしさと驚きを感じられたようでした。親睦会では、米寿を迎えられた福島勝也様、石塚哲也様にもご参加いただき、幅広い世代が交流する場となりました。

10 月 18 日

名古屋支部の皆様4名と懇親を深めました。名古屋化学会支部会は毎年開催されており、より多くの参加者を募りたいとのことです。近隣県の皆様はぜひご連絡ください。

10 月 19 日

工学部同窓会に、今年は関西支部からの参加はありませんでした。

11 月 22 日

福岡支部同窓会に菅本和寛教授とともに参加し、教授の就任祝いも兼ねて研究室卒業生の方々が多数出席され、24 名による賑やかな会となりました。若い世代の参加率の高さは工学部同窓会からも高く評価されていました。

11 月 29 日

ニューウェルシティ宮崎にて、化学会理事長である菅本和寛先生の教授就任祝賀会を化学会主催で執り行いました。保田昌秀名誉教授、松下洋一名誉教授、三重野彰敏顧問、化学会会員、研究室 OB・OG、現役学生の皆様など 44 名のご参加をいただき、盛大にお祝いすることができました。

また、秋の叙勲において、有機化学研究室の松井隆尚名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。菅本和寛教授の恩師でもあり、お祝い事が重なる一年となりました。

最後になりましたが、化学会は今後とも皆様とともに歩んでまいりたいと存じます。年会費は、会報の発行など、化学会会員と大学の化学科をつなぐための大切な原資となります。何卒ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、会報第 1 号発行時の会長であった日高兵馬顧問(昭和 22 年卒)が、本年 7 月に 100 歳を超えるご年齢でご逝去されました。当時の化学会役員の皆様とともにご尽力いただき、現在の化学会の礎を築いてくださいました。ここに深く感謝の意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

理 事 会 報 告

宮崎大学化学会本部理事長に就任しました菅本和寛(平成3年卒)です。身に余る大役ではございますが、諸先輩方より受け継がれてきた本会の歩みを大切にしつつ、化学会のさらなる発展に努めてまいります。また、今回より理事会報告も担当させていただきます。会の活動や理事会での議論について、分かりやすくお伝えできるよう心がけてまいります。微力ではございますが、会員相互の交流と後進の育成に貢献できるよう尽力いたしますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、令和7年度の理事会は、令和7年10月4日(土)に宮崎大学において開催された、宮崎大学卒業生の集い「ホームカミングデー」(酒井教授および卒業生9名参加)終了後、改修を終え新しくなった工学部学生実験室にて開催いたしました。理事会の開催に先立ち、日高会長をはじめとする役員12名の会場参加およびオンライン参加者3名、ならびに10名委任状の提出により、本会が成立していることが報告されました。その後、

- (1)令和6年度事業報告
 - (2)令和6年度会計報告
 - (3)令和7年度事業計画(案)および会報No.39の編集案
 - (4)令和7年度予算(案)
 - (5)役員の変更
 - (6)その他
- について審議が行われました。

工学部同窓会の行事として、日高会長に出席いただいた工学部同窓会卒業・修了祝賀会(2025年3月24日)、関東工学部会(2025年6月14日)、工学部同窓会(2025年7月19日)、中部工学部会(2023年10月18日)、関西工学部会(2025年10月19日)、北部九州工学部会(2025年11月22日)、ならびに工学部同窓会主催の県内企業 OB・OG 交流会(2025年12月5日)が開催されたことについての報告がありました。令和6年度の会計報告では、収入の部として龍宮会からの寄付があったこと、支出の部として会報No.36,37の発行に関する支出や、慶弔関係の支出があったことが報告され、承認されました。さらに、会報No.39の編集案および令和7年度の予算(案)について説明があり、いずれも承認されました。当日の夜には、本部理事会懇親会と宮崎支部定期総会を合同で開催し、木島先生、保田先生、卒業生20名にご参加いただき、和やかな雰囲気の中で有意義な懇談を行うことができました。

以上が令和7年度理事会報告となります。

理事会報告の内容ではございませんが、令和7年11月26日(土)に、宮崎大学化学会の主催により、私の昇任祝賀会を開催していただきました。恩師である松下先生、保田先生をはじめ、42名もの皆様にご出席を賜りました。このように盛大かつ温かい会を催していただきましたこと、心より御礼申し上げます。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

最後にお願ひがあります。化学会のホームページ(<http://www.web-dousoukai.com/kagakukai/>)および工学部同窓会の名簿システムへの登録および活用をお願いいたします。各種行事の日程確認、住所情報の更新、会費納入状況、会員相互の連絡などが行えます。郵便、電話、FAX、電子メールなどによる住所変更も受け付けております。会員名簿のより一層の整備にご協力をお願いいたします。登録方法が分からない場合は、工学部同窓会事務局または化学会事務局にご連絡ください。また、Facebook に化学会会員の情報交換の場として、宮崎大学化学会のプライベート・グループを開設いたしました。Facebook で、「宮崎大学化学会」でグループを検索するか、URL(<https://www.facebook.com/groups/329041939877936/>)に直接アクセスして参加の登録をお願い致します。

皆さまのご理解とご協力を、何卒よろしくお願い申し上げます。



宮崎大学工学部化学会(本部) 令和6年度会計報告

令和6年4月1日～令和7年3月31日

収入の部		支出の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年繰越	724,941	No.36,37会報発行	132,889
本部会費	101,173	事務費他	840
寄付(龍宮会から)	27,247	化学会大同窓会	439,126
化学会大同窓会会費	350,000	慶弔費	36,520
利息	84	支出合計	609,375
		翌年度繰越	594,070
合 計	1,203,445	合 計	1,203,445

○宮崎大学工学部化学会会則○

第1条 本会は、宮崎大学工学部化学会と称し、本部を宮崎大学工学部内に置く。また必要に応じ、支部を置くことができる。

第2条 本会は、会員相互の親睦をはかり、会員ならびに宮崎大学工学部環境応用化学科の発展を期することを目的とする。

なお、ここでのいう化学系とは、工業化学、物質工学、物質環境化学、環境応用化学、応用物質化学、化学生命を指す。

第3条 本会は、次の会員をもって組織する。

1. 正会員

- ①宮崎工業専門学校化学工業科卒業生
- ②宮崎大学工学部化学系卒業生
- ③宮崎大学大学院工学研究科化学系修了生
- ④宮崎大学大学院農学工学総合研究科化学系（工学）修了生

2. 学生会員

- ①宮崎大学工学部化学系学生
- ②宮崎大学大学院工学研究科化学系学生
- ③宮崎大学大学院農学工学総合研究科化学系（工学）学生

3. 特別会員

宮崎大学工学部化学系旧教職員および同大学工業教育研究部化学系関係教職員

第4条 本会には運営にあたる本部に次の役員を置く。

1. 会 長（1名）
2. 副会長（5名）
3. 理事長（1名）
4. 事務局長（1名）
5. 常任理事（30名以上）
6. 理 事（各支部代表者）
7. 会 計（1名）
8. 監 査（2名）
9. 顧 問（若干名）

第5条 本会には会員相互の親睦をはかるため、以下の支部を置く。

1. 宮崎支部
2. 福岡支部
3. 関西支部
4. 名古屋支部
5. 東京支部

第6条 役員は、次の方法により定める。

1. 会長、副会長は、会員の推薦により理事会で承認する。
2. 常任理事は、会員の推薦により、会長が委嘱する。
3. 理事は、各支部より選出された支部長とする。
4. 理事長および事務局長は、常任理事および理事の互選とする。
5. 会計および監査は、会長が委嘱する。

第7条 役員の職務は次のように定める。

1. 会長は、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれに代わる。

2. 理事長は、会務を執行する。

3. 事務局長は本会の事務を分掌する。

4. 常任理事は、理事長を補佐し、会務を分掌する。

5. 理事は支部を代表して本部との連絡にあたる。

6. 会計は、本会の会計を執行し、監査は本会会計を監査する。

第8条 理事会、常任理事会の運営については、次のように定める。

1. 理事会は、会長が招集し、会務を協議する。
2. 理事会は会長、副会長、理事長、事務局長、常任理事、会計及び監査をもって構成する。
3. 理事会は、委任状を含めて構成員の過半数で成立し、議決は、出席者の過半数の同意を必要とする。
4. 理事会は、年1回以上開催するものとする。
5. 常任理事会は必要に応じて理事長が招集、開催し、理事会の決定に従い、通常の会務を執行する。
6. 常任理事会は理事長、事務局長および常任理事をもって構成する。

第9条 役員の任期は1年とし、再選は妨げない。

第10条 支部長は、支部における事業の概要および会員の移動等について、毎年4月末日までに報告するものとする。

第11条 本会の運営費は、正会員会費（年額一口1,000円以上）と有志の寄付をもって充当する。

第12条 本会の会計年度は4月1日より始まり、翌年の3月31日で終わるものとする。

第13条 化学会会員名簿は、必要に応じて発刊する。

第14条 本会則の改正は、理事会の承認により行う。

付 則

本会則は、昭和56年5月30日から実施する。

平成元年7月22日一部改正

平成2年7月14日一部改正

平成11年6月26日一部改正

平成22年6月12日一部改正

平成28年6月25日一部改正

平成30年7月7日一部改正

令和6年12月7日一部改正

令和7年10月23日一部改正

宮崎大学化学会役員名簿

2026.4.1

	役 職	氏 名	卒業年		役 職	氏 名	卒業年
本 部	会 長	日高 宗徳	59	宮 崎 支 部	支部長	山下 敏明	60
	副会長	原田 繁利	38		理 事	川越 義則	H4
	〃	佐藤 松男	41		〃	原田 繁利	38
	〃	井上 利行	46		〃	湯浅 直克	43
	〃	原口 章司	62		〃	黒木 幸英	45
	〃	清山 史朗	H4		〃	田村 孝	49
	理事長	菅本 和寛	H3		〃	三島 幸一郎	62
	事務局長	宮武 宗利	H5		〃	宮武 宗利	H5
	常任理事	福島 勝也	35		〃	有馬 明美	H9
	〃	石塚 哲也	36		〃	岩熊 美奈子	H11
	〃	河野 恵宣	38		〃	廣澤 直也	H16
	〃	前田 武	39		〃	松本 朋子	H17
	〃	黒木 幸英	45		〃	土井良 俊輔	H19
	〃	満永 利夫	48		〃	大柴 薫	H26
	〃	明石 保雄	53		会 計	金丸 慎太郎	H19
	〃	堤 信夫	61		監 査	清山 史朗	H4
	〃	三島 幸一郎	62		〃	鶴田 哲也	H11
	〃	河野 豊	H1		事務局長	菅本 和寛	H3
	〃	後藤 健児	H1	東 京 支 部	支部長	田原 修二	58
	〃	二見 宗英	H1		副支部長	池田 博之	55
	〃	猪股 康久	H4		副支部長	太田 好俊	H4
	〃	小林 吾一	H5				
	〃	戸次 太道	H7				
	〃	梅元 大輔	H8				
	〃	坂元 登	H8	名 古 屋 支 部	支部長	高松 昇司	63
	〃	穂田 幸治	H9		副支部長	原 明男	46
	〃	小玉 誠	H10		副支部長	大杉 収	46
	〃	岩熊 美奈子	H11		理 事	菊 健	40
	〃	長友 秀峰	H11		〃	上田 和生	43
	〃	越智 洋	H12		〃	鈴木 博統	H7
	〃	吉山 武伸	H12		〃	寺尾 匡史	H17
	〃	石橋 奈穂子	H12	関 西 支 部	支部長	正明 耕一	H5
	〃	古市 佳代	H13		幹 事	小宮 広志	45
	〃	津波 伸一郎	H14		〃	山元 賢二	57
	〃	甲斐 康平	H15		〃	塚崎 孝規	H19
	〃	廣澤 直也	H16		〃	池田 百合子	H21
	〃	松本 朋子	H17		監 事	田幡 正裕	H1
	〃	江間 智	H17	福 岡 支 部	支部長	牟田 惣彦	H6
	〃	金丸 慎太郎	H19		幹 事	外園 令明	55
	〃	荒木 志織	H21		〃	小柳 直之	H2
	〃	平野 誠一朗	H28		〃	米倉 誠	H9
	〃	福島 拓己	H30		〃	中村 一生	H10
	理事(東京)	田原 修二	58				
	〃(名古屋)	高松 昇司	63				
	〃(関西)	正明 耕一	H5				
	〃(福岡)	牟田 惣彦	H6				
	〃(宮崎)	山下 敏明	60				
	会 計	稲田 飛鳥	H24				
	監 査	山下 敏明	60				
	〃	真 隆志	H4				
	顧 問	三重野 彰敏	47				

支部だより ～東京支部～



支部長
田原修二
(58 年卒)

化学会の皆様、如何お過ごしでしょうか。
2025 年を振り返りますと、近年相次いでいた大規模災害や社会的混乱が比較的に少なく、久しぶりに落ち着いた一年であったように感じられます。一方で、国際情勢や資源・エネルギー問題など先行きの不透明感は依然として残っています。また、国内では 2026 年に入って行われた衆議院総選挙では自民党が圧勝し、政治的安定への期待から株価上昇や円安といった、いわば既定路線の市場反応も見られました。こうした安定と不透明さが同居する時代において、科学技術が果たすべき役割を改めて考える一年にしたいものです。

関東支部では、年間を通じていくつかの行事を実施していますが、その中でも最大のイベントが、例年 6 月に開催している「関東工学部同窓会」です。本会は化学科に限らず、工学部全体を対象とした同窓会であり、世代や専門分野を越えた交流の場として、関東支部活動の中核をなす行事と位置付けています。

2025 年度は機友会が主幹事となって開催され、会場をバトゥール東京に移して実施されました。参加者は約 120 名にのぼり、関東工学部同窓会としても非常に盛況な会となりました。分野別に見ると土木系の参加者が約 3 分の 1 を占めるなど、工学部全体としての広がりを感じさせる構成となっており、同窓会が特定分野に偏らない交流の場として機能していることを改めて実感しました。化学会からの参加も多く、一次会には 14 名、二次会には 15 名が参加、分野内外での活発な交流が行われました。特に印象的であったのは、入社 5 年以内の若い世代が 16 名参加してくれたことです。化

学科からも 1 名が参加しており、これまで同窓会とはやや距離のあった若手層が、この場に自然に加わり始めていることは、今後の支部活動を考える上で非常に心強い結果でした。単なる懇親の場に留まらず、世代を越えたつながりが生まれる場として、同窓会の意義が改めて確認できた一年であったと感じています。

一方で、支部運営のあり方についても、時代の変化に合わせた見直しを進めています。東京支部発足以来、50 年以上にわたり続けてきた年賀状によるご挨拶については、本年度をもって終了することと致しました。会費制を廃止したことに加え、転勤や転職による住所変更、郵便事情の変化などを踏まえると、従来の方法を維持することが難しくなってきたためです。今後はメール等を活用した、より確実に効率的な連絡手段に移行し、必要な情報を確実にお届けしていきたいと考えています。

これからも、関東支部として、時代に合った形で活動を継続し、世代や分野を越えたつながりを大切にしていきたいと考えています。引き続き、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりますが、皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。また、皆さんからのご意見、アドバイス等もお待ちしております。



宮崎大学関連工学部東京化学会(R7.6.15)

支部だより ～名古屋支部～



支部長
高松昇司
(63 年卒)

この度、前任の原さんの後任として名古屋支部長となりました高松です。

現在、岐阜県のイビデン(株)で、セラミック事業本部の事業企画として勤務しています。

昨年 10 月 4 日に、「宮崎大学ホームカミングディ」に参加させて頂き、卒業以来初めて宮崎大学に入らせて頂きました。

ホームカミングディとは、2011年にスタートした、学部垣根を越えた卒業生と恩師と職員などとの交流の場です。

「ホームカミングディ」での学生発表では、

1) 幼稚園での楽器づくり体験や生の演奏会などの音楽探検隊の活動報告。

2) 侵入動物から農業を守る AI による撮影、追払い、追跡システムの提案。

また、職員の研究発表では、

3) 大豆栽培で発生する温室効果ガス(NO_2)に対して、大豆の根粒菌のゲノム解析を用いた分析と研究にて確認された低減の提案。

など、どの報告からも新しい発想で頑張ってみえる姿を実感出来て、大変嬉しく感じるとともに、明るい未来を少し感じました。

「ホームカミングディ」の懇親会は、生協の食堂で行われ、工学部に加え、農学部、教育学部、医学部など男女を含め幅広い年代の方々との会話、ゆるキャラの「みやだいもうくん」の紹介や学生からの歌のサービスや大学関連商品の抽選会などもあり、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。



宮崎大学創立 330 記念交流会館

午後からは「化学会理事会」が、改修工事されたばかりの実験研究棟で行われ、学生だった当時のメンバーや様子を思いだす機会にもなりました。ただ各支部とも近年個人情報の保護が厳格化される中、新規の対象者および連絡先が掴めず新しい人に参加して頂くのに苦戦している現実を確認させて頂きました。

夕方からは「化学会宮崎支部の定期総会および懇親会」にも参加させて頂きました。20 人以上のメンバーで、大変活気があり学生の時のエネルギーをそのまま維持されている印象でした。料理も注文し放題・飲み放題・時間無制限で、生ガキ、地鶏の炭焼き、チキン南蛮、各種鉄板焼き、各種揚げ物・冷菜・ご飯もの・デザートなどもあり、5,000 円に満たない金額で信じ難いものでした。一番街も昔のままのにぎやかでした。

翌日は、学生時代漕艇部で毎日練習した「大淀川の河口(宮崎港)」に行きました。10 月初旬と言えば新人戦の前の時期なのに、漕いでいる姿も河口の横にあったボートもありませんでした。廃部になったのだろうと改めて感じました。代わりに河口の海側ではサーフィンをやっている人、宮崎港側は、運輸会社や水産会社の多数の倉庫、港で釣りをしている人々、避難用の高台、フェリーのターミナル、また漁船だけでなく、水産高校の立派な船や NED(液化 CO_2 運搬)の船など、昔とは全く異なる景色でした。(河口側は昔のままで、それはそれで嬉しかったです)

最後に「青島」に行ってきました。サーフィンやサップを楽しむ若者達、砂浜で遊ぶ子ども達、鬼の洗濯岩の上を歩く大人達、またトウクトウが走る青島神社への橋、おしゃれな野外カフェなど素敵な世界がありました。



2 日間ではありましたが、楽しい時間を過ごすことが出来ました。宮崎支部の方々ありがとうございました。

本部および各支部および職員の皆様、今後ともよろしくお願い致します。

…以上です。…

支部だより ～福岡支部～



支部長
牟田惣彦
(H6 年卒)

化学会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、昨今の世界情勢に目を向けますと、地政学リスクの高まりは看過できない状況にあります。ロシアによるウクライナ侵攻や中東情勢の緊迫化など、国際社会は不安定さを増しております。とりわけ、日本は原油の多くを中東地域に依存していることから、原油や LNG 価格の高騰に加え、「ナフサ」など石油化学由来原料の供給制約により、サプライチェーンの混乱が顕在化しております。私の勤務する会社においても、その影響が徐々に及びつつある状況です。

一方で、明るい話題もございます。ミラノ・コルティナ冬季オリンピックにおける日本選手の活躍や、惜しくも準々決勝での敗退とはなりましたが、ワールド・ベースボール・クラシックにおける侍ジャパンの健闘など、スポーツ界は大いに盛り上がりを見せております。夏には FIFA ワールドカップの開催も控えており、さらなる感動と勇気を与えてくれることと思います。

ここで、私事ではございますが、少しご紹介させていただきます。私は平成 6 年に工業化学科を卒業後、福岡県北九州市に本社を置く三島光産株式会社に入社いたしました。今年 5 月に創業 110 周年を迎えることができました。弊社は、AGC様をはじめとする化学業界、日本製鉄様をはじめとする鉄鋼業界、トヨタ自動車

様をはじめとする自動車業界を事業基盤とし、関東・大阪・北九州に 21 拠点、グループ会社 7 社、海外 2 拠点を展開しております。工業化学科および物質環境化学科の卒業生も多く在籍し、各分野で活躍しております。

その中で、私は総務部にて庶務・広報・環境安全の業務に携わっております。

さて、福岡支部におきましては、同窓会活動の活性化に力を入れてまいりました。例年 11 月に北部九州工学部同窓会が開催されておりますが、これまで比較的年齢層の高い集まりとなっております。昨年は菅本教授や原口副会長をはじめ皆様のご協力のもと、ホームページでの告知や SNS を活用した卒業生への呼びかけを行い、24 名の参加を得ることができました。菅本教授ならびに日高会長にもご臨席いただき、工学部の中でも最も活気のある化学会となりましたことを大変嬉しく感じております。

同窓会のご案内は、宮崎大学工学部同窓会のホームページや Instagram、Facebook 等の SNS にて発信しております。ぜひ同級生や知り合いの皆様にもお声掛けいただき、多くの方にご参加いただけますと幸いに存じます。

結びに、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げますとともに、同窓会などでお目にかかれすことを楽しみにしております。



北部九州工学部同窓会(R7.11.22)

支部だより ～宮崎支部～



支部長
山下敏明
(60年卒)

今年度の宮崎支部の活動および近況についてご報告いたします。昨年7月12日(土)、宮崎大学工学部にて、宮崎支部の理事会を開催し、会計報告、会則の一部改正について話し合いました。10月4日(土)には、化学会本部ならびに宮崎支部の理事会を行ったあと、合同での懇親会を開催しました。支部の理事会には、遠くは名古屋支部長の高松昇司さんにも参加いただいて、名古屋支部の取り組みについて紹介していただきました。また、この日は、2年ぶりの「宮崎大学ホームカミングデイ～卒業生の集い～」が宮崎大学木花キャンパス創立330記念交流会館にて開催され、化学会のメンバーも参加しました。歓迎式典、学生発表、研究発表後、懇親会が大学生協にて行われました。



理事会後の懇親会「華しずく(宮崎市高松町)」にて

おめでたいお話ですが、昨年11月に菅本先生が教授にご昇任されました。その祝賀会が11/29(土)にニューウェルシティ宮崎で、化学会日高会長の呼びかけで開催されました。木島先生、保田先生、松下先

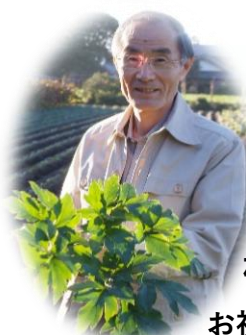
生の他、化学会のメンバー、菅本研究室の学生、あわせて43名が参加し、盛大に行われました。

さて、話は変わりますが、第81回国民スポーツ大会(国スポ)および全国障害者スポーツ大会(障スポ)が来年9～10月に宮崎で開催されます。それに伴い、宮崎県で初めての屋内型50mプールが宮崎駅の近くに、また、陸上競技場が都城市のとなりの山之口町に建設されました。霧島酒造株式会社がネーミングライツ(命名権)契約を取得しましたので、陸上競技場の名前は「KUROKIRI STADIUM」となりました。すぐ隣には、補助競技場としての「AKAKIRI FIELD」も併設されました。かつて宮崎で国体が開催されたのが1979年(昭和54年)でしたので、実に48年ぶりの開催となります。宮崎から遠く離れた卒業生の皆様も、霧島酒造の焼酎「黒霧島」「赤霧島」に氷を浮かべて、「国スポチャンネル」で観戦されてはいかがでしょうか。



陸上競技場「KUROKIRI STADIUM」

前回、「サードプレイス」としての同窓会の役割についてお話しいたしましたが、化学会を「サードプレイス」として利用してみたいと思われる方は、“宮崎大学化学会”で検索してみてください。化学会をとおして、新しい巡り合いや展開が生まれるかもしれません。



「瑞宝中綬章」受章

松井先生「瑞宝中綬章」受章おめでとうございます

お祝いのメッセージ 長井 輝（60年卒）

松井先生、このたびは「瑞宝中綬章」ご受章誠にありがとうございます。長年にわたるご卓越したご功績が認められた事、教え子の一人として大変嬉しく思います。

さて今回東京支部長の田原先輩より寄稿の依頼があり、誠に僭越ではありますが私から松井研究室時代の思い出、先生への感謝を述べてさせて頂きたいと思います。

私は1981年に宮崎大学入学後、3年生後期(12月位)に松井研に仮配属されました。配属前はかなり多忙な研究室である事を聞いておりましたが、有機合成化学を深く勉強したいという意思がありましたので自ら志願しました。その後本配属となり本格的な研究生活が始まりましたが、なかなかうまく目的化合物を合成する事が出来ず、毎週実施される検討会が憂鬱になっていた事が思い出されます。結局学部卒業時までには目的化合物を合成する事が出来ず、先生と将来の事も含め相談した結果、大学院への進学を決めました。大学院進学後は先生か

らの熱意あるご指導により、目的化合物の合成に成功、更にその化合物を用いて色々な変換反応を実施し日本化学会で成果発表する事が出来ました。就職の際にも色々と相談に乗って頂くと同時に推薦状まで頂き、第一志望であった大日本インキ化学工業(株)(現 DIC(株))の技術職として入社出来ました。先生のご指導の中でも化学反応機構に関する講義は特に印象に残っており、理論に沿って仮説を立て、実験で検証する事は社会人になってからも製品開発に大変役に立っております。

又研究室メンバーと先生宅に招かれ、奥様の大変美味しい手料理をもうこれ以上は食べられない位ご馳走になった事、研究室での焼肉パーティ、木花キャンパスへの移転作業等も良い思い出となっています。

先生から学んだ事は今でも私の仕事や生活の中で大きな指針となっており、大変感謝しております。最後になりましたが、先生の今後の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

お祝いのメッセージ 菅本 和寛（H3年卒）

宮崎大学名誉教授・元宮崎大学教授である松井隆尚先生におかれましては、令和7年11月3日、瑞宝中綬章の栄に浴されましたことを、心よりお祝い申し上げます。

先生は昭和43年4月に宮崎大学工学部助手として着任されて以来、助教授、教授を歴任され、長年にわたり教育・研究・大学運営に尽力されました。平成22年3月に定年退職後、同年5月には宮崎大学名誉教授の称号を授与されております。また、有機化学・天然物質化学分野において数々の優れた研究業績を残されるとともに、樹木成分やバイオマス利用、地域資源活用研究などを通じて、地域社会の発展にも大きく貢献されました。さらに、学生教育や後進の育成、公開講座などを通じた社会貢献にも力を注がれ、多くの人々に深い感銘を与えてられました。

このたびのご受章は、先生の長年にわたる学

術・教育・社会貢献への多大なる功績が高く評価されたものであり、松井研究室の卒業生であり、先生の研究を助手として手伝わせて頂いた私にとりましても誠に喜ばしく、大きな誇りであります。先生の教えを受けた日々は、今日の私の礎となっております。研究に対する真摯なお姿勢、物事を深く探究される情熱、そして学生一人ひとりを温かく導いてくださったお人柄は、今も鮮明に心に刻まれております。先生から学ばせていただいた「身近なものにも常に興味と疑問を持つ姿勢」は、研究者としてのみならず、人としての生き方にも大きな影響を与えてくださいました。

長年にわたり築いてこられた先生のご功績に、改めまして深甚なる敬意を表しますとともに、今後ともますますご健勝にてお過ごしになられますことを心よりお祈り申し上げます。誠にありがとうございます。

特集 菅本和寛先生 教授就任おめでとうございます

お祝いのメッセージ 廣澤直也 (H16 年卒)

このたび菅本先生が教授にご就任されたこと、心よりお祝い申し上げます。

先生には、学生時代から社会人となった現在に至るまで、長きにわたり大変お世話になってきました。

大学時代、研究室では専門的な知識や研究の進め方など多くのことをご指導いただきましたが、今でも特に印象に残っているのは、放課後に研究室のメンバーと先生も一緒になって、ほぼ毎日のようにサッカーをしていたことです。先生と学生という立場を越え、同じフィールドで汗を流した時間は、人としての距離を一気に縮めてくれる、かけがえのないものでした。

また、起業を考え始めた頃、共同研究の相談に伺った際にも、先生は快く受け入れてくださいました。創業当初は研究室に頻繁に足を運ばせていただき、多忙な中でも親身になってご助言をいただきました。日向夏の皮、ダマスクローズ、茶種、マンゴー種子といった多様な宮崎県産素材を対象に、精油やオイルの抽出および成分分析に関する研究に取り組ませていただきました。さらに、先生のお声かけで、共同研究の成果を佐賀、広島、さら

にはハワイの学会で発表する機会をいただいたことは、学生時代に学会発表の経験がなかった私にとって、非常に貴重で忘れられない経験となりました。

研究や仕事にとどまらず、私のプライベートにおいても、結婚式では心のこもった祝辞を頂戴しました。そのとき、一人の教え子としてだけでなく、一人の人間としても温かく見守っていただいていることを、改めて実感いたしました。また、今年の教授昇任祝賀会では、私が開始時間を勘違いして遅刻するという失態もありましたが、それすらも笑顔で受け止めてくださいました。そうした先生の温かさや懐の深さに、今もお深く感謝しております。

そして今年からは、また新たな共同研究が始まり、変わらずお世話になっています。学生、卒業生、会社員、経営者と立場が変わっても、常に相手の成長を第一に考え、手を差し伸べてくださる先生は、本当に面倒見が良く、心から尊敬できる素敵な存在です。

菅本先生の今後ますますのご活躍とご健勝を、心よりお祈り申し上げます。

お祝いのメッセージ 土井良俊輔(H19年卒)

菅本和寛先生、この度は教授就任おめでとうございます。私だけでなく、周りの方、皆さん菅本先生の教授就任を今か今かと待ち望んでおり、まるで自分事のように喜んでおります。さて、私は 20 年程前の研究室の仮配属から菅本先生にお世話になっております。当時は松井教授、松下助教授(准教授)そして菅本助教(助手)でした。私の研究はスギ材の蒸煮水溶液の成分分析をテーマに行っており、菅本先生には修士論文の際、HPLCで分取したもの等の構造解析(NMR)や様々な実験についてご教授頂きました。また、お忙しい中にも関わらず、他の研究室へ便宜を図って頂いたこともあり、一学生である私のためにも尽力を惜しまず、熱心にご指導頂きました。私が無事論文を完成させることができたのは、先生のお力添えもあってのことだと、今でも感謝しております。

研究室の思い出と致しましては、やはり「無人島キャンプ」です。学生であった我々の「釣りだけで一日過ごすことはできないか」の思い付きに、菅本先生も乗っていただける若さに凄さを感じました。当日の食糧は現地調達で、一緒に無人島で魚釣りをしたこと、朝日の昇るところを一緒に見たこと、今も昨日のことのように覚えています。先生が全員分ご馳走してくれた、帰りにいったマクドナルド、今は子どもと行くことも多いですが、あれほどおいしく感じたハンバーガーはありません(相当お腹が

減っていたのかもしれませんが…笑)。私が就職してから宮崎支部の同窓会やテニスに参加させていただき、また、大学の講義の一環で講師の依頼を頂き、教壇に立たせて頂いたこともあります。かつては向こう側(学生側)であったが、先生側に立たせて頂き、先生がどんな目線で講義しているか、どう伝えているのか、なかなか普段では味わうことの出来ない貴重な経験をさせて頂きました。

今も昔も変わらず、パワフルで若く、エネルギーと仁愛に溢れている菅本先生だと、この記事を読んでいる皆さんも共感されていると思います。あとはケガと病気の無いよう、これからの研究を楽しんでいただけることを願っております。最後になりますが、菅本先生の今後ますますのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせて頂きます。

菅本教授、万歳！！



菅本先生 教授就任祝賀会(R7.11.29)

応用物質化学/化学生命プログラム

化学会会員の皆様におかれましては益々ご清栄のことと存じます。プログラムを代表してこの1年の状況を報告いたします。工学部は令和3年度から1学科6プログラム体制となりましたが、令和7年度から社会要請に対応すべくさらに改編がなされ、化学系は「化学生命プログラム」となりました。基本的な専門科目のカリキュラムは改編前の応用物質化学プログラムのものを土台とした応用化学系らしい教育内容ですが、一部の講義・演習をより生命化学寄りに変更し、卒業生がライフサイエンス分野でも活躍できるよう教育を充実させてまいります。研究でも一部の教員が医工連携、農工連携の研究を展開しており、従来からの無機・有機材料関係のみならず、分野横断的な研究へと発展を遂げつつあります。工学部の大規模改修は第2工期となり、半数以上の教員の研究室は改修工事の終わった新しい部屋に戻ってきました。2026年の前半には化学系の教員研究室は全てリニューアルされます。

去る2024年の塩盛弘一郎先生の急逝に

令和7年度プログラム長 大島 達也

教員・学生は喪失感を抱いておりますが、そのご遺志を胸に、関係者は研究・教育の発展のため前進する所存です。11月からは菅本和寛先生が教授に昇任され、早速に全学の学び・学生支援機構副機構長に就任されて活躍されています。また、4月からは稲田飛鳥先生が准教授に昇任され、講義に研究にと奔走されています。さらに、10月より特別助教として山下 祐典先生が着任されました。鹿児島大学大学院で博士号を取得されて直後に本学に来ていただき、教育・研究に新たな活力をもたらしてくれています。

産業界の人材不足を背景に、卒業期の学生の就職活動は近年良好です。少子化により大学への志願者数は減少傾向にあり大学運営は財政面でも難しい状況ですが、不断の挑戦により研究を深化させるとともに、新たなカリキュラムと教育体制で社会の期待に応える高度専門人材を輩出してまいります。最後に、卒業生の皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げるとともに、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

教 員 名 簿

(令和8年4月1日現在)

組織	教授	准教授	助教
化 学 生 命 プ ロ グ ラ ム	井 澤 浩 則 大 島 達 也 奥 山 勇 治 酒 井 剛 努 白 上 和 寛 菅 本	稲 田 飛 鳥 宇 都 卓 也 鍋 谷 悠 樹 廣 瀬 遵 樹 永 直 樹 松 根 英 樹 松 本 仁	宮 武 宗 利 山 下 祐 典
工 学 基 礎 教 育 セ ン タ ー		大 榮 薫	

研究室紹介・酒井研究室

教授 酒井 剛

皆さん、こんにちは。以前は無機研とも呼ばれていた、無機系材料を主たる研究領域とする酒井・松永研究グループの酒井 剛です。松永直樹准教授と協力しながら研究室を運営させていただいています。酒井研は、2012 年の学部改組に伴って環境ロボティクス学科の所属になりましたが、2021 年度の学部改組により応用物質化学プログラムに戻ってきました。2025 年度から、応用物質化学プログラムは化学生命プログラムに組織名称が変更になっていますが、我々の研究グループの研究対象は、燃料電池、二次電池、磁性材料など電気化学的特性が利活用される無機材料の合成と特性評価であることは一貫して変わっておりません。酒井、松永両名とも令和 6 年度に科学研究費補助金基盤研究(C)が採択されており、それぞれ二次電池の正極材料およびアルカリ形燃料電池の電極触媒の開発を実施しています。

酒井研の主軸となる研究テーマは、固体高分子形燃料電池用電極触媒の開発に向けた酸化チタン系触媒担体の合成とゾル化およびニッケル系二次電池の正極材料の高性能化に向けた新規層状化合物の合成と評価で、松永研では、アルカリ形燃料電池用電極触媒の開発およびニッケルフェライト系材料の電気化学特性と磁気特性評価を展開しています。いずれも実用化を視野に基礎研究を進めています。

2025 年度は、酒井研に修士課程学生 6 名(M2:3 名、M1:3 名)と学部学生 4 名が在籍し、松永研には修士課程学生 3 名(M2:1 名、M1:2 名)と学部学生 4 名が在籍しています。3 週間に 1 度のペースで開催

している検討会では、それぞれの研究の進捗を吟味しながら常に新しい挑戦を心がけて勉学と研究に取り組んでいます。2024 年度から 2025 年度にかけて工学部 A 棟の大規模改修があり、約 1 年間農学部北棟 1 階に間借りするという状況でしたが、2024～2025 年度に在籍した酒井・松永研究室学生諸子の活躍によって、行き帰りの引っ越し作業はもとより、引っ越し先での研究活動の継続、さらには、改修後の A 棟研究室内の再整備などが滞りなく進み、おかげさまで、現在は改修された新しい環境で実験・研究ができるようになっています。本当に一致団結して取り組んでくれた学生諸子には深く感謝しています。卒業・修了生の皆様も、一度改修された研究室をご覧ください。

学生にとっては集大成というべき、卒論・修論発表会が終わって一息ついた頃、研究室メンバーで、“卒論・修論・中間発表おつかれ打ち上げ&仮配属生歓迎会”を開催しました。同窓生に皆さんには、その雰囲気を感じていただき、温かく見守っていただくとともにそれぞれの当時を思い出して懐かしんでいただけたら幸いです。



卒論修論打ち上げ

令和 7 年 3 月修了生・卒業生修論・卒論題目

<大学院>

氏名	論 文 題 目	指導教員
甲斐 隆寛	ミカン搾汁残渣からのβクリプトキサンチンの回収と製剤化による水分散性向上	大島
生島 優	ピラー[6]アレーン酢酸誘導体によるアミノ酸・タンパク質の認識とその応用研究	大島
池田 浩大	光診断・治療ハイブリッド型光増感剤の開発を指向した非対称グルコースーリンポルフィリン複合体の開発	松本
池水 康	薬剤内包ナノカプセルの開発と新規環境応答性機構の付与に関する研究	松根
一宮 大起	ゲルマニウムポルフィリン・酸化チタン複合電極を用いたメタノールの光触媒的酸化反応	白上
門川 雄大	酸性抽出剤による金属抽出分離における中性配位子共存の影響検討	大島
河野 晃大	酸性抽出剤を用いたアミンのイオン交換抽出に基づく二酸化炭素の固体化法の検討	大島
北島 義士	アオモジ葉の成分の分離・分析と生物活性評価	菅本
黒田 葉月	アミノ軸配位子を有するリンポルフィリン錯体の低pH活性化と細胞内酸塩基平衡の解析	松本
古賀 咲也香	Mn存在下におけるNiおよびCoの高選択的分離のための新規抽出剤の開発	菅本
神川 直也	フェルギノールから5,6-デヒドロ-6-ヒドロキシ-7-オキシアビエタンジテルペン類への変換	菅本
柴田 侃太	分子集合体により構造制御された新規銀ナノワイヤーの調製法	松根
末永 ひな乃	フッ素系極性溶液中におけるポリペプチド鎖の立体構造安定性	宇都
杉井 秀彰	ヒュウガトウキ地上部に含まれる成分の分離・変換・分析と生物活性評価	菅本
須本 啓明	深共晶溶媒の創出と新規抽出剤によるレア金属の抽出分離	菅本
竹田 ひかり	ゲルマニウム-N-混乱ポルフィリン錯体を増感剤とする一重項酸素生成反応の高効率化	白上
谷口 愛里沙	難水溶性生理活性物質の経口吸収性を改善する脂質分散体の開発と評価	大島
西田 龍矢	キレート形成能を有する層状複水酸化物の開発と金属分離特性評価	大榮
橋本 協	タンパク質マイクロカプセルの界面活性剤被膜による徐放抑制に関する研究	松根
日高 直哉	疎水性クライオゲルに担持したリン脂質膜の構造制御による分子認識分離への応用	松根
福吉 晃大	シュードモナス属細菌によるα-トルイル酸の分解に関する研究	廣瀬
星原 尚斗	金属イオンとペプチド間の錯体形成に基づくナノ粒子の開発と構造制御	稲田
前田 元	脂溶性ポルフィリン固定化リボソームによる光増感酸化反応	松本
宮本 大靖	ナノスクロール反応場を利用した金ナノ構造体の作製	鍋谷
本村 章	金属イオン誘起型ペプチドハイドロゲルの開発と物性評価	稲田
森井 薫	末端にアルコキシ基をもつアゾベンゼンとニオブ酸ナノシートの複合体開発	鍋谷
米倉 健太	セルロース結晶における非晶化およびゲスト分子拡散の熱力学的評価	宇都

< 学部 >

氏名	論 文 題 目	指導教員
相川 裕理	塩素原子を有する <i>N</i> -混乱ポルフィリン誘導体による一重項酸素生成反応	白上
青嶋 ひなた	ピフェニル含有多フッ素化界面活性剤の合成と機能性ナノスクロールの作製	鍋谷
安藤 聡汰	キトサンのアセチル化による再生ナノキチンの創製	井澤
飯尾 百華	ジチオールの逐次酸化反応による高分子微粒子の生成と反応速度解析	松根
石川 悠	フェルギノールからモントブリチル-12-メチルエーテルとモントブリツールへの変換	菅本
石田 武	ニッケルフェライトの低温合成と銀触媒担持法の開発	松永
宇野 綾花	カチオン骨格を変化させたイオン液体中におけるセルロース溶解シミュレーション	宇都
岡元 仁胡	シュードモナス属細菌KF707株による芳香族カルボン酸の分解	廣瀬
奥村 綾子	スタツツェリモナス属細菌由来のゲノミックアイランドの探索	廣瀬
神戸 彩葉	ナノスクロール反応場における銀ナノ構造の作製	鍋谷
古賀 天大	コバルト-スズ複合酸化物および酸化コバルト担持酸化スズの合成法の検討	酒井
後藤 かれん	酵素内包シリカカプセルの開発	宮武
小松 蓮	硫黄化合物をインターカレーションした層状複水酸化物複合体による有害金属吸着特性評価	大榮
酒井 翔人	酢酸基を有する大環状ホスト化合物によるアミン抽出能力の比較	大島
佐々木 拓海	薬物送達を目指した還元条件応答性金属有機構造体の開発	稲田
高田 碧	イソステアリン酸とTOPOによる深共晶溶媒の創出とCo(Ⅱ)/Ni(Ⅱ)の選択的分離	菅本
竹山 明里	セラミックス分散によるプロトン伝導性セラミックスの水和膨張による割れ抑制	奥山
田島 瑞喜	加水分解によるNiO-SnO ₂ 複合体の合成の検討	酒井
田代 涼花	両親媒性リンポルフィリン錯体の水素化による可視光吸収波長の長波長化	松本
恒松 海音	酵素内包クライオゲルの調製法の検討	宮武
戸高 広夢	新規多フッ素化アルキルアゾベンゼン誘導体の合成とナノシート複合体の作製	鍋谷
豊田 翔梧	亜鉛置換ニッケルフェライト前駆体の水熱処理と焼成による調製条件の検討	松永
中崎 亮慎	Mn添加CaZrO ₃ を電解質とした電気化学セルの発電特性と発熱挙動	奥山
中玉利 翔馬	Ga(Ⅲ)抽出溶媒探索のための機械学習と多段の溶媒和抽出によるGa(Ⅲ)およびIn(Ⅲ)の分離	大島
中野 里琴	Ni-N-混乱ポルフィリン錯体による一重項酸素生成反応に対するカチオンの添加効果	白上
中村 茜里	ジスルフィド結合の骨格をもつ膜からなるナノカプセルの開発と刺激応答性	松根
中村 晃大	トレハロースを鋳型にした酵素内包シリカナノカプセルの調製条件と酵素活性の関係性	松根
中本 偉行	液相還元および加水分解による銀微粒子調製条件の検討	松永

< 学部 >

氏名	論文題目	指導教員
野村 航揮	塩基性条件下での評価に適した白金担持カーボン粉末のインク調製と電極化および電気化学特性	松永
橋本 幾久	シリカ膜被覆酵素内包カプセルの調製に関する基礎的知見の収集	松根
濱田 凌佑	インピーダンスにおける周波数緩和とプロトン/デューテロン置換における同位体緩和による固体高分子形燃料電池の電極反応機構の解明	奥山
平野 空	不溶化した凝集タンパク質への新規溶媒開発	大島
平松 尚晃	金-ジペプチドナノコンポジットの開発	稲田
古市 修輔	脂環式化合物で構成されるイオン液体の分子シミュレーション研究	宇都
外菌 賢志郎	スプレー法で製膜したプロトン伝導性セラミック中間層を伴ったPCFCの耐久性	奥山
星崎 圭亮	バナジウム置換水酸化ニッケルの合成と水熱処理による新たな六方晶構造の創成	酒井
本谷 春樹	プリスタン酸両ジアステオマーの合成	菅本
松垣 克明	銅添加ニッケルフェライトの水熱合成と低温緻密化の検討	松永
南之園 菜央	Ni-Al系層状複水酸化物薄膜作製と微生物燃料電池への応用	奥山
三根 碧海	ピペラジニル基を有するリンポルフィリン錯体の光増感-重項酸素生成能におけるpH応答性	松本
宮下 拓人	アゾベンゼン/ニオブ酸複合体の光誘起層間伸縮運動における熱効果	鍋谷
宮田 蒼	グアニジル化キトサンの合成方法の検証	井澤
牟田 響	酢酸セルロースの加水分解酵素に対するドッキング解析	宇都
村川 史織	テトラエチレングリコールリンカーを介してグルコースを連結したBODIPY誘導体の合成	松本
村社 隼太郎	各種溶媒におけるアミン抽出剤を用いたRu(III)の抽出特性	大島
馬上 力	ホタルシフェリンの構造改変による青色発光基質の開発	白上
森田 和樹	キノコを原料とするキチン・キトサンの製造	井澤
守田 成志	ブルーベリー葉と茎熱水抽出物中のプロアントシアニジンの分離	菅本
山口 雄大	セリシン吸着材による有価金属および有害金属の吸着特性	大榮
山下 倫果	鉄置換による α 型水酸化ニッケルの合成と電気化学特性	酒井
行山 尚寿	バイオ消臭剤からの α -トルイル酸分解菌の分離	廣瀬
吉岡 夏希	アセチル化度を制御した双イオン性キトサン誘導体の創製	井澤
渡邊 健介	Zn置換水酸化ニッケルにおける他元素共置換効果と溶媒熱処理による α 相の高結晶化	酒井
佐藤 紗颯	スズポルフィリン錯体を増感剤とするメタノールの光酸化反応	白上
南園 錬	ヒュウガトウキ地上部に含まれる血圧上昇抑制作用に関与する成分の分析	菅本
曾根 健聖	グアニジル化キチンナノクリスタルの分散性	井澤

令和 7 年 3 月修了生・卒業生就職先一覧（順不同）

< 大学院 >

(): 学生数

フタムラ化学(株)	大陽日酸(株)	ニプロ(株)	マイクロメモリジャパン(株)
日本パーカラライジング(株)	エア・ウォーター(株)	松本油脂製薬(株)	JSR(株)
東京エレクトロングループ	三菱自動車工業(株)	東洋アルミニウム(株)	三菱ケミカル(株)
東邦チタニウム(株)	住友大阪セメント(株)(2)	三菱重工業(株)	京セラ(株)(2)
ローム(株)	山九(株)	三菱電機(株)	宮崎県庁
(株)トクヤマ	(株)JCU	Japan Advanced Semiconductor Manufacturing(株)(2)	
日世(株)			

< 学部 >

(): 学生数

(株)宮崎銀行	(株)LIXIL トータルサービス	京セラ(株)	日立造船(株)
京セラ(株)	KJケミカルズ(株)	松田産業(株)	(株)日立産機システム
SCSKニアショアシステムズ(株)	(株)再春館製薬所	山崎製パン(株)	ジャパンファインスチール(株)
(株)ハイマックス	東郷メディキット(株)	太平洋セメント(株)	(株)SALTO
経済産業省 九州経済産業局	長崎県庁	熊本県庁	鹿児島県庁
曾於市役所	宮崎大学大学院工学研究科(28)	九州大学大学院(2)	東京科学大学大学院
岡山大学大学院			



在校生より

6 年間の大学生活を振り返って 工学研究科工学専攻環境系コース 2 年 西川亮也

私が大学に入学したのは、ちょうどコロナ禍の真っ只中でした。講義の多くはオンラインで行われ、大学へ登校する機会は月に数回程度しかありませんでした。想像していた大学生活とは少し異なる形でのスタートとなり、地元を離れて宮崎で一人暮らしを始めたこともあり、不安や孤独を感じることもありました。しかし、3 年生になる頃にはコロナ禍も徐々に落ち着き、対面授業や学生実験などが再開されました。そして 4 年生の最後には、シーガイアで全員参加の卒業式が開かれました。入学式を同じ場所で行うことができなかったこともあり、卒業式は特に印象に残っています。

研究室に配属されてからは、研究が大学生活の中心となりました。実験がうまくいか

ないことも多かったですが、指導教員や研究室の先輩方、同期、後輩に恵まれ、充実した日々を送ることができました。また、交換留学生への実験指導や、化学を通じた高校生や子どもたちとの交流、学会発表など、さまざまな経験をする機会にも恵まれました。これらの経験から、物事を伝えることの難しさと楽しさを特に学べたと思います。



西川本人右から 2 番目

振り返ると、この 6 年間はあっという間で
した。コロナ禍という特別な状況から始まっ
た大学生活でしたが、多くの方々に支えられ、
さまざまな経験を積むことができました。大
学での経験を活かし、4 月からは社会人とし
て気を引き締めて頑張っていきたいと思いま

す。宮崎を一度離れることとなりますが、6 年
間で出会った宮崎の美味しいものを食べに、
またいつか遊びに行きたいです。これまで関
わってくださった先生方や研究室の皆様、友
人たちに心より感謝しています。

未知なる我を求めて— 4 年間の軌跡— 応用物質化学プログラム 4 年 田中智瑛

宮崎西高等学校在学中、理科の恩師から
勧めていただいたことをきっかけに、本学へ
の進学となりました。当時は工学系の研究や
大学生活について明確なイメージを持ってい
たわけではありませんでしたが、恩師の言葉
に背中を押され工学・化学の世界へ入りました。

私が大学生活を始めた頃は、コロナ禍が
落ち着きを見せだした時期でした。社会全体
が少しずつ日常を取り戻そうとする中で、大
学でも対面での講義や活動が再開されてい
きました。コロナ禍を経て、それまで当然とさ
れていた生活様式や学び方が見直され、「当
たり前」という概念が決して不変ではないこ
とを実感しました。こうした変化の中で大学
生活をスタートできたことは、物事を固定的
に捉えず、多様な可能性を考える契機となり
ました。

普段の講義では化学を中心とした専門分
野の学修に取り組み、基礎となる物理化学や
無機化学、有機化学をはじめ、生命化学や
高分子化学など、「化学」を多角的に学んで
きました。これらの分野はそれぞれ異なる視
点を持ちながらも、物質や生命現象を理解す
るうえで密接に結びついており、学びを進め
るほどに化学という学問の奥深さと広がり
を感じていきました。また、他プログラムの講義
も履修し、異分野の知識や視点に触れること

で、自身の視野と知見を広げる機会となりま
した。さらに、将来教育に関わる可能性も視
野に入れ、教職免許取得のためのカリキュ
ラムも履修しました。教育に関する理論や学校
現場の課題を学ぶ中で、教師という職業が
単に知識を伝えるだけではなく、生徒一人ひ
とりの成長を支える重要な役割を担う存在で
あることを実感しました。

週末や空いた時間には、多種多様な業務
を経験し、大学の講義だけでは得ることので
きない社会との関わり方や責任感を学びまし
た。また、読書や言語学習にも継続して取り
組み、専門分野にとどまらない幅広い教養を
身につけることを心がけてきました。

この 4 年間は、社会の変化を身近に感じな
がら、自分の進む方向を模索する時間でも
ありました。さまざまな経験を通して、変化す
る状況にも柔軟に向き合い、自分なりに考え
ながら前へ進むための「しなやかさ」を少しず
つ身につけ始めたと感じています。今後もこ
れまでの経験を糧に、学び続ける姿勢を大切
にしながら、自分の可能性を広げていきたい
と考えています。

「逆境」の体験は
未来の自分への
最高の「ギフト」だと
そう信じて。

報告

卒業生による特別講演会

令和7年11月14日(金)、卒業生による特別講演会が学部3年生と修士1年生を対象に「教員と学生の懇談会」と合わせて開催されました。平成20年に本学物質環境化学専攻を修了され、霧島酒造株式会社に就職された上西 由弘 氏に「社会人として後輩へのアドバイス」のタイトルで講演をしていただきました。会社の概要、ご自身の学生時代の経験、就職活動および現在の仕事の内容と

やりがいなどを、ユーモアを交えて楽しい講演をしていただきました。ご講演、ありがとうございました。（文責：宮武宗利）



講演会中の上西氏

報告

2024 年度卒業式

令和7年3月24日(月)、宮崎市のフェニックス・シーガイア・リゾートシーガイアコンベンションセンター4Fサミットホールにおいて、令和6年度宮崎大学卒業証書・学位記・修了証書授与式が挙行されました。その後、プログラム別に分かれて卒業懇談会が実施されました。卒業生の皆様は、これから社会へと旅立

って行かれますが、健康には十分気を付けて活躍してくれることを期待しております。何か困ったことがありましたら、大学の先生方に連絡をとってみてください。また、化学会の先輩方が周りにいるかもしれません。探して、相談してみるのもいいかもしれませんね。



2024年度 卒業式プログラム集合写真
(令和7年3月24日 シーガイアコンベンションセンター)

3回目(「清武と飢肥の時代」「江戸の時代」「明治の時代」の3回シリーズ)

宮崎市の偉人「安井息軒」を

もう一度見つめ直してみませんか

NPO 法人安井息軒顕彰会副理事長兼事務局長 黒木幸英(45 年卒)

「清武と飢肥の時代」「江戸の時代」「明治の時代」の3回シリーズで、「安井息軒の生きざま、すごさ」を紹介していますが、今回は最終回の「明治の時代」です。(お詫び:前回記載では、青山大介氏を現宮崎大学特任准教授と記載しましたが、令和7年10月から広島大学准教授に就任。)

明治の安井息軒

○明治初年の息軒

官軍代表の西郷隆盛と幕府軍代表の勝海舟が江戸の薩摩藩下屋敷で無血開城の会談を行った前日、息軒は官軍を避けるために武蔵国領家村(埼玉県川口市)に疎開し、1868年の9か月間の疎開先での生活の様子を『北潜日抄』に綴っています。同年7月江戸は東京に改称され、9月には年号が「明治」に改元された頃、息軒は彦根藩から延岡・相馬・上之山藩の共同出資による『左伝輯釈』出版の打診を受けました。同年11月息軒は彦根藩別邸に居(三計塾)を移し、『左伝輯釈』を校正し、出版しました。

○頼られる息軒:明治の三計塾

息軒は1862年幕府の儒官となった際に飢肥藩籍を外れて幕府直参になっていましたが、明治2年5月頃に飢肥藩世子伊東祐帰が三計塾に入門したのを契機に、同年7月飢肥藩籍に復帰しました。飢肥藩主祐帰は息軒を「家老上席二十人扶持」という高待遇で迎え入れ、さらに三計塾のために桜田上屋敷内に200人の門弟を収容できるだけの部屋を用意しました。

三計塾は、盛況を極め(最高136名の入塾生)、塾生の氏名と出身地は『遊従及門録』で確認できますが、明治政府の官僚や藩知事等、新政府に参画して日本の近代化に貢献した人物等2000名を超えます。

○晩年の息軒

明治4年7月廃藩置県、同年9月に三計

塾は土手三番町に移転。明治5年8月新政府の「官費生の私塾禁止令」(学生公布)により三計塾の塾生が激減しました。

明治7年頃から息軒は視力も衰え、明治9年9月23日、大勢の門人や知人たちが見守る中逝去。死因は「滯飲症」(慢性胸膜炎)。病床で子々孫々に向けて書き綴った『睡余漫筆』が絶筆となりました。息軒の墓は東京の養源寺にあります。

息軒書物は孫の安井小太郎が引き継ぎ、没後は九州帝国大学(現九州大学)を経て、慶応大学創立100周年の際「斯道文庫」に、滄洲や小太郎の関連資料を含め7,000冊が保管され研究されています。

○出版された息軒著『管子纂詁』『左伝輯釈』『論語集説』『救急惑問』他

○翻訳された息軒書『弁妄』(「鬼神論」「与某生論政事書」)『救急惑問』『時務一隅』他

○語られた息軒『安井息軒先生』(若山甲蔵 大正2年)『安井夫人』(森鷗外 大正3年)他

編集後記:3回シリーズでしたが、記載スペースに限度があり、十分に紹介できませんでした。安井息軒を学習や研究されたい方は、「安井息軒記念館」のホームページをご覧ください。

.....

●告知●

安井息軒没後150周年記念事業を9月27日(日)宮崎市清武文化会館で開催します。

..... あとがき

ここに会報 No.39をお届けします。ご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。会報発行が遅くなりまして誠に申し訳ございませんでした。これからの会報の内容の充実を図り読み易いものにするために、何かお気づきの点がありましたら、化学会本部事務局までご連絡頂けたら幸いです。

最後に皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

令和8年8月 編集委員一同